アチックにおける隠岐調査

――アチック研究史における隠岐調査の位置づけ――

The Oki Survey by the Attic Museum: Position of the Study History in the Attic Museum

小林 光一郎

KOBAYASHI Koichiro

要　　旨

アチックの第一次・第二次隠岐調査（昭和9年5月、昭和10年8月）における調査成果は当時の貴重な事例報告であるとともに地域における貴重な民俗・歴史資料であり、別地糸満に関わる資料など、隠岐以外の地域においても貴重な記録となっている。また、アチックの研究史においても同調査はさまざまな意義・意味を持つ調査であった。

まず、アチックで行われた「イトマン」として括られる人々や漁民・船、あるいはこれらの移動・出漁などの研究において、薩南十島調査とそこから引き続き行なわれる第一次隠岐調査までが、アチックにおける研究のはじまりであり、具体的な調査が第二次隠岐調査であったこと。次に朝の潮汲みという民俗学的慣行からは、「日本人」と塩の関係性という民族学的視点へと展開し、アチックにおける「塩」という研究課題を更に考えさせた事例であったこと。16ミリによる牛突き撮影では、農業や漁業といった生業面以外で行なわれる余暇的・余興的な行事ということを意識した上での撮影であり、後の新潟県古志郡二十村の牛突き調査にまで繋がる事例であったこと。第二次隠岐調査を基本とした三篇の報告書がアチック初の刊行物で、それぞれが総合的な民俗誌でなくても貴重な資料となりうることを示し、そこに資料や研究に関する多様な視点を持ったアチックの姿勢が間見えていることなどである。

アチックではこの隠岐調査以降もさまざまな調査を行い、アチック関係者による総合的な民俗誌を目指した調査としては昭和12年の志摩和具調査において行われることになる。その前段を為す隠岐調査は、限定的であれ「資料を提供する」というアチックの理念に基づいた姿勢の下に報告書を刊行し、「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究の文脈上における調査としてのメルクマールであり、且つ、アチックにおけるさまざまな研究のメルクマールともなった調査でもあったのである。

【キーワード】　アチック・ミューゼアム、隠岐、民俗調査、民俗学史、イトマン

1. はじめに

本書は、アチック・ミューゼアム（以下、アチック）並びにその主催者であった渋沢敬三（以下、敬三）の調査活動や、それによって得られた諸資料およびアチック同人に関する情報の追加・補充・蓄積などの、アチックの実態の追求を主眼とした基礎研究を行うことを目標とし、「アチック・ミューゼアムの調査活動に関する基礎研究「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察」として2015年度より2ヵ年間にわたり調査・研究を行った研究成果報告書である。

本研究以前におけるアチックについての研究史としては、2013年度の敬三没後50年を記念して渋沢敬三記念事業実行委員会が主体となって行なった「渋沢敬三記念事業」に関連した諸々の研究活動において、ある一定の成果が出たといえる情勢にはある。しかし、2013年を経た現状において、その多くの成果やアチックについての検証などが引き続き行われているとはいえない状況である。上記で「ある一定の成果」と述べたことも、敬三没後50年という時限に合わせた成果であり、言い換えれば2013年に間に合わせた検証・研究であって、その多くが引き続き作業を継続する、または課題を次の研究に残すというかたちであった(1)。また、これらアチックの調査・研究の検証が、民俗学や民具研究、漁業史研究などといった研究史として急務である点においても、「ある一定の成果」からの進展が必要である。

以上のような現状を踏まえ本研究においては以下の目的に則り調査・研究を行った。まず、アチックで行われた調査を研究単位とし、調査がどのような理由で、どのような方法で、どのような結果だったのか、その実態の解明を目的とし、さらに、アチック内への結果的な影響やその後の同人たちの研究に与えた影響などの研究史的考察、調査対象地である隠岐における調査当時の状況から現在における経年変化の記録化、調査当時と現行の民俗事象の考察など、隠岐やその周辺地域の領域における民俗も研究対象とした考察をも視野に研究を行うことを目指した。

具体的な研究対象としては昭和9年5月に敬三はじめアチック同人とされる研究者によって行われた「隠岐調査（第一次）」と、昭和10年8月に桜田勝徳や山口和雄、岩倉市郎によって行われた「隠岐調査（第二次）」を基本とし、地域としては隠岐ならびに上記の調査に関連した境港や島根半島の一部も含むものとした。研究方法は、各研究機関に引き継がれたアチックに関する諸資料、なかでもすでに2012年に神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）から刊行された『アチック写真 vol. 6』を基本的な資料の原典とし、そこからの情報の更新として内容の補塡・充実を目指した。具体的な研究対象の資料としては常民研所蔵資料（アチック写真やアチック・フィルム、彙報や研究ノート等）や宮本記念財団所蔵資料（写真資料や映像資料、宮本馨太郎メモ等）、渋沢史料館所蔵資料（敬三の手帖や映像資料等）、国立民族学博物館所蔵資料（アチック時代に収集された民具資料等）、慶應義塾大学文学部古文書室所蔵櫻田勝徳資料（櫻田勝徳未刊行ノート）(2) などを基に調査の検証・分析を行った。

本書は、アチックの隠岐調査に関する写真や映像・民具を網羅した総合的な資料編と、それらから判明した結果に基づく論文編という体裁でまとめられている。本論ではこの論文編の一つとして、本研究であらたに判明・更新したアチックの隠岐調査の概要とアチックの調査・研究史上における隠岐調査の特徴とその意味を考察するものである。

2. 第一次隠岐調査、第二次隠岐調査の概要

まず、本研究の成果から、アチックの隠岐調査で残された写真を再編集した『アチック写真

vol. 6』を基礎に、前述した関連諸資料群の情報を追加して、第一次・第二次隠岐調査の詳細を改めて提示することにする。その詳細は本書掲載の翻刻資料等を参照していただきたいが、本章では、第一次・第二次隠岐調査の概要として、第一次隠岐調査については、上記『アチック写真 vol. 6』の情報や敬三が生前にまとめた「第三部　旅譜と片影」(1961「第三部　旅譜と片影」『犬歩当棒録』)、櫻田勝徳資料「隠岐一」「隠岐二」「八束の海辺」、宮本馨太郎資料(「昭和 9 年 5 月 20〜26 日」以下、宮本馨太郎メモ)、高橋文太郎「隠岐島の旅」(『ドルメン　第三巻　第八号』昭和 9 年 8 月)をもとに、第二次隠岐調査については、『隠岐島前に於ける　糸満漁夫の聞書　隠岐調査報告第二』『隠岐島前漁村採訪記』『アチック写真 vol. 6』をもとに、それぞれの調査地・日程等の情報を加えた調査概要を提示する。

1)第一次隠岐調査・八束半島調査:昭和 9 年 5 月 23 日〜27 日、5 月 27 日〜31 日

薩南十島調査を終えたアチックの一行は、鹿児島から広島回りで一路隠岐へ向った。敬三、小川徹、早川孝太郎、宮本馨太郎、高橋文太郎、村上清文らは、広島で礒貝勇に面会(礒貝は広島から途中の西城まで同行)し、東城経由で 23 日松江着、午後 6 時 20 分発「隠岐丸」(定期船。499 噸)に乗船、途中、境港に寄港し、薩南十島調査後、一旦博多に戻っていた桜田勝徳(以下、桜田)がここから同乗して合流、午後 11 時発、翌 24 日午前 5 時、隠岐島前浦郷に到着した。

一行は浦郷の岸本旅館で休憩後、浦郷の有志の人々と船にて船越へ向かい、外海へと通じる掘割(船引運河)を抜け国賀を通り、三度へ上陸。三度から陸路、赤ノ江を経由し浦郷へ戻る。浦郷にて再び岸本旅館で休憩後、船越へ自動車で向かい、次いで別府にて後醍醐天皇旧跡を見た後、別府から中ノ島海士村菱へと渡り、糸満人の出漁、長門大浦の海女の出漁などを聞いた後、海士村中里へと渡り、後鳥羽上皇の火葬所とされる場所を見学、午後 6 時半中里から、午後 8 時過ぎ島後都万へ到着。予め頼んでおいた自動車にて 9 時 40 分原田の大河屋(大河旅館)に到着し宿泊。

25 日、原田から池田の国分寺をまわり、原田に戻った後、都万目、五箇村一宮水若酢神社、山田と自動車で回り、床山越へから中村へと回り同地米屋旅館に宿泊。

26 日、中村から船にて飯美、大久へと回り、大久から東郷に出て水産学校に寄った後、西郷にて式内社である玉若酢命神社、今は消滅した飯の山横穴古墳などを見学する。

27 日、隠岐調査を終えたアチック一行は、島後西郷から 26 日の夜行船で朝 5 時境港に着いた。敬三はじめアチック同人は東京への帰途に就いたが、当時、九州帝国大学助手をしていた桜田はひとり、帰福の前に島根半島へと向かった。大根島寺津でソリコ船・カンコ船や桁網漁、藻葉採取、朝鮮人参や大根といった農業、姓・門名、家屋、正月行事などの話を聞き、対岸の島根半島万原へ船で渡る。そこからバスで美保関に行き神社で諸手船を見学、当時(昭和 9 年現在)実際にモロタ船を製作していた船大工に作製や神事などを聞く。午後 5 時、乗合自動車で美保関を出発。宇井から七類へ向かい七類で一泊。

28 日、七類にて、さまざまな物の名前や家屋、カナギ漁、地引網、漁具、年神などの話を聞く。その後、七類から片江に向かい、村役場にて村の概要や明治期の地先海面の入会漁場に関する契約証を筆写する。片江から菅浦を通り稲積へ向かう。稲積にて、役場で筆写した文書の網漁などの話を聞き、野波へ向かう。野波では荒物屋に一泊。地引網や船、物名、オハケ(神の依代としての性格を持つ歳木)、正月行事(トンド)、塩などを聞く。

29 日、野波から詰坂を超え加賀へ向かう。加賀にて、漁や船宿などの話を聞き、その後、御津へと向かい御津から乗合自動車で北松江へ、そこで電車に乗り秋穂町(秋鹿町)で下車。宍道湖の漁業の話を聞こうとするが漁師が沖へ出ており話を聞けず、宿を求めて小境灘へ向かい一泊。

30日、宍道湖の漁や農業の話を聞いた後、電車で大社神門駅にて下車し出雲大社を参拝。その後、乗合自動車で日御碕神社へと向かう。日御碕神社社務所にて由緒書を筆写後、宇龍に向かい、肥後次一郎氏より往時の四つ張漁や地引網などの話を聞く。宇龍から大社神門に引きかえし、午後5時発の汽車にて12時島根県正明市にて一泊。翌31日朝正明市を出発、同日帰博する。

2）第二次隠岐調査：昭和10年8月10日〜23日

第一次隠岐調査後、桜田勝徳・山口和雄・岩倉市郎の三人によってあらためて隠岐調査が行われる。昭和10年8月9日東京を出発、10日境港着、天気の都合により境港にて、以前に美保関で漁業に従事していた北田仁太郎氏、11日、美保関にて美保関神社の横山氏や漁業組合員森山林市氏・野村専蔵氏と、10・11日の両日ともに漁業のことを中心に聞く。

11日夜、美保関をたち、12日早朝、隠岐黒木村船越に到着[(3)]。同地安達和太郎氏宅に17日まで滞在し、糸満の漁夫大城カメ氏を中心とする糸満の漁業や安達家の漁業経営、同地の半農半漁的な生業、三圃制農業などを中心に調査する。18日は浦郷に泊まり同地の漁業についてを聞く。19日、中ノ島へと渡島後、同日海士村菱、翌20日に豊田にて各々の農業についてを聞く。21日午前、知夫里島知夫に上陸し同地の漁業について聞く。23日午前1時半、知夫を出発して隠岐を後にする[(4)]。

第二次隠岐調査では途中、岩倉が持病を再発し帰京することもあったが（20日に帰京）[(5)]、桜田・山口の二人はそのまま調査を続け、糸満漁民の漁業や隠岐の漁業（地引網など）、牧畑の三圃式農業などを調査している。

3. アチック研究史における隠岐調査の位置づけ

1）第一次隠岐調査に至る経緯　―「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究について―

敬三をはじめとするアチック同人らは、隠岐調査の直前である昭和9年5月12日から20日まで、薩南十島調査を行い、サバニと呼ぶ刳り舟に乗り各地へ出漁している糸満漁夫に実際に出会ったり、話を聞いたりしている[(6)]。山口和雄は昭和10年8月の第二次隠岐調査について「隠岐の島前に安達という大きな漁業家がおりました。（中略）その糸満の連中が安達家にひと夏雇われて隠岐にやって来て、彼らの舟と漁具で漁業をやる。わざわざ沖縄まで行かなくても、隠岐へ行けばそれがみられるから、それをひとつ調べたらどうかということと、それから隠岐は日本で三圃制農業の行われている唯一の場所といわれているので、そこの牧畑農業も見聞しようという点もあったり、まあいろいろなことがありまして、隠岐へ行ってみたらという渋沢さんの発案で出かけたのです」と述べている〔山口　1978　57-58〕。前述した薩南十島調査において、アチック同人らは中之島や小宝島、奄美大島名瀬町などで、「糸満人」とされる糸満の人々や、「イトマン」として括られる人々（必ずしも糸満出身の人だけに限らない）などに出会っている〔小林　2015〕。この調査中に糸満漁夫が隠岐にも出漁していることを聞いたのであろう、この糸満漁夫が隠岐へ出漁に出ていることが隠岐へと向かう一つの要因となり[(7)]、実際、隠岐海士村菱にて「糸満人」の話を聞いている（櫻田「隠岐手帖一」）。

拙著「アチック・ミューゼアムの研究における渋沢敬三のポジション―イトマン・出漁・移動を事例に―」において、「「イトマン」とは、文字通りの糸満だけではなく、むしろイトマンとして括られる人々（必ずしも糸満出身の人だけに限らない）や、漁民、船、あるいはこれらの移動・出漁な

どを指す概念であり（以下、「イトマン」）、転じて、移動・出漁する人々にまで繋がる概念である。」〔小林　2015b　124〕とした上で、敬三が民俗学・民族学的研究を志す当初から「イトマン」に対する興味を抱き、アチックとしても薩南十島調査や隠岐調査において「イトマン」に対する研究を行ったことを論証したように、薩南十島調査とそこから引き続き行なわれる第一次隠岐調査までが、アチックにおける「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究のはじまりであり、具体的な調査を行うのは第二次隠岐調査がその嚆矢といえるであろう。

2）朝の潮汲み（島前三度）〈第一次隠岐調査〉　―「塩」の研究について―

第一次隠岐調査の初日は、早朝からの調査ということもあり三度で朝の潮汲みをする女性に出会っている（図1、図2）。常民研所蔵映像「隠岐之島景観」カット22、23においてその映像が残され、『隠岐島前漁村採訪記』においても、この第一次隠岐調査での事例から「毎朝神や夷様へ参る時に海水を手桶に汲んで持ってゆく」（山口・桜田一九三五、一四九頁）と報告されている。

この三度での事例は、中馬制度の調査（「信州浪合、中馬街道」調査。昭和6年9月）や塩釜跡の調査（「男鹿、石神、八戸」調査。昭和9年9月～10月）などのアチックにおける「塩」に関連した調査の一事例となるのであり、且つ、この体験がその後の敬三自身の「塩」に関する歴史的観にも影響を与えたと考えられる。

戦後に行われた民間伝承編集部による「渋沢敬三先生を囲んで　塩の民俗を語る（座談会）」において、敬三は次のように述べている。

「それ（筆者注：正月行事でホンダワラを使うことについて）は直接これに続くのじゃないけれども、隠岐島であなた方（筆者注：桜田勝徳）と見ましたね。三度部落でね、お婆さんが、小さな桶に海水を汲んで来て、ホンダワラみたいなもので、その水を振りかけていましたが、これに華ならず海藻を使っております。」〔民間伝承編集部編　1959　22〕

「とにかく、藻と海水というものは、全然無縁のものでないことは確かですね。だけれども、そうだと云い切るにはもう少し早いのじゃないかという感じもしますが……。

しかし、それよりもっと面白いと思ったのは、僕は塩の論文を書いたときにそう思ったのですが、越後の三面―あすこに行ったときに、高橋源蔵さんところのお婆さんが毎朝、きたないお椀にきれいな清水を汲んで、それへ薄ぎたない塩をわざわざ入れて、それを方々へかけているのです。なんだか禊からいえば、きれいな清水で結構そ

図1　三度　朝の潮汲みをする女性（シヲタガを持つ女性）。（常民研所蔵映像「隠岐之島景観」カット22）

図2　モバを入れたシヲタガ（図1と同一人物）。（常民研所蔵映像「隠岐之島景観」カット23）

うなものだがわざわざああいう山の中でも、海から取れた塩を入れているということは、どうも日本人全体が、海に対する―塩を通じて―なんかバックグラウンドがあるという感じが非常にしましたね。あの時非常にその感を深くしましたね。」〔民間伝承編集部編　1959　22〕

話中の事例は、時系列こそ逆ではあるが、前者が隠岐調査での出来事であり、後者は「越後三面」調査の出来事であって、時系列順にみて、昭和6年6月と昭和8年5月の「越後三面」調査の際の出来事と昭和9年5月の第一次隠岐調査においての経験を述べている。おそらく隠岐にて見た「朝の潮汲み」は越後三面で見た潮汲みを思い起こさせ、山の中と島という地理的条件は違えども国内の別の場所において、塩水を使った同じ慣行に対して興味を持ったために覚えていた事例だと考えられる。

その後、同座談会において敬三は塩に関して次のように述べている。

「僕は塩のことにやっておって、面白いと思ったのは、結局日本においては、海というか海水というものと、われわれの生活というものが案外つながっているということ、塩を通じてつながっているという感じを強くもったことが一つと、もう一つは、塩だけはたくさんあっても喰わない、一生を通じて喰う量は殆んどきまっている。これは延喜式時代でも今でも大して違いがないということ。これは塩の持った一つの特異性で砂糖と違いますな。砂糖のように、あればあるだけ舐めるということは絶対ない。

だから、その点で経済史的にこれを見ると、一種のメルクマールになりますね。それで面白いポイントだということを感じたんですがね。ところが、工業塩になってくると全然別で、何万トンあったってもほかの物になって行くのですから、これは違いますけども……。」〔民間伝承編集部編　1959　23〕

このように、敬三の中で、朝の潮汲みという民俗的慣行から「日本人」と塩の関係性という民族学的視点へと展開していった要因の一つが、隠岐調査での事例であり、また16ミリフィルムにもその様子をわざわざ2カットに収めていること（常民研所蔵16ミリフィルム「隠岐」カット22、23）から、第一次隠岐調査中からその注目度や重要性が高かった事例であり、その後の敬三やアチックにおける「塩」という研究課題を更に考えさせた例であったと考えられる。

3）島後の牛突き〈第一次隠岐調査〉　―アチックにおける牛突き調査―

第一次隠岐調査（昭和9年5月）において牛突きを見た後、アチックでは昭和10年4月に新潟県古志郡二十村においても牛突きを見ている。牛突きについてはこの隠岐における事例を嚆矢として、その後のアチックの研究における興味・関心となった可能性が考えられる。ちなみに昭和9年時点では牛突きに関する民具等の収集は行っておらず（牛に関するものでは耕作用の「ハナズル」を同年5月25日に収集している【民博標本番号H 0016649】）、その後の第二次隠岐調査においても、調査地が島前であったため牛突きについての調査を行わなかったという調査姿勢からも伺えるが、この時点では人々の生活や生業に関する調査・民具収集を主な調査と考えていた傾向にあり、牛突きのように直接的に生業に関連しないような事例にまで資料収集を行えなかったと考えられる。しかし、アチックはこの牛突きを軽視していたわけではなく、島（この場合、島後）における行事・習俗の一つとして捉えていたからこそ、牛突きの映像を撮影していたと考えられ、農業や漁業といった生業面以外で行なわれる余暇的・余興的な行事ということを意識した上で撮影を行った可能性が

考えられ、それが後の新潟県古志郡二十村の牛突き調査にまで繋がったと考えられる。

4）第一次隠岐調査におけるアチックの資料収集態勢

第一次隠岐調査におけるアチックの資料収集の特徴は以下の二つがあげられる。

一つ目は、直接に収集し持ち帰るパターンである。第一次隠岐調査においてアチックの一行は船越にて第二次調査での調査起点となる安達家を訪れている。その際、収集した資料の中には安達家のものとして、チャテタガ（民博標本番号 H 0017313）がある。これは安達家で先代武夫氏が亡くなったときに作ったものでその後も墓参り時に使っていたものであったが、「渋沢さんはこの桶の形が珍しいとお持ち帰りになった」〔安達　1986　46〕という。また、安達家から「安政三年申三月駄賃帳　長崎俵物役所」をはじめとした古文書二十三通もアチックに対し貸与されている〔安達 1986　46〕。

二つ目は後日輸送（郵送）するパターンである。国立民族学博物館所蔵『民具標本収蔵原簿』において、度々寄贈者として表れる「岩井亀千代」は、本研究の共同研究者である木村の再調査により「松江市、文化自動車株式会社、岩井亀千代」の人物であることが確認できた。この「文化自動車株式会社」が、現在の一畑電気鉄道株式会社によって昭和 21 年 5 月までに吸収合併された会社であることから、岩井は、第一次隠岐調査の島後における自動車の運転手であったと考えられ、運転手であった地元（島後）の岩井によって、後日、アチックに資料を送付してもらったため『民具標本収蔵原簿』の寄贈者名に岩井の名が表れたと考えられる。この岩井の事例は、アチックにおいて資料を管理する際に、現地収集をした直接の収集者ではなく、資料の送付者（この場合、岩井）の名前で管理した場合もあったということが分かる事例である。

また、第一次隠岐調査では資料を輸送できなかったという事例も確認できる。同調査においてアチックの一行はトモドも資料として収集しようとしたが「折角のご希望だったのにも拘らず、長尺物（長さ二十尺余幅三尺）で輸送が困難だったためか実現できず残念がっておられたそうです。」〔安達　1986　46〕と、その時の様子を、その場にはいなかった安達勇（後述）が後に述べており、輸送の手はずさえ整っていたならば船（この場合、トモド）のような比較的大型な資料も資料として収集しようとしていたことが分かる事例である。

4. アチック同人に与えた影響　―第一次隠岐調査後の敬三・桜田―

1）渋沢敬三の調査における態度とその後

島後中村にて〈第一次隠岐調査〉　―敬三の隠岐調査の様子―

調査先の敬三について桜田は以下のように述べている。

> 「隠岐の中村で泊った時には、渋沢子爵というふれこみだが、にせものだろうと噂さをされたという。あまり気のつかぬ筆者でさえ、隠岐の中村を歩く頃の敬三の洋服は、今にもズボンの尻がぬけそうに思われるものであったことを思い出すと、辺僻な中村の人がにせものと感ぐっても、少しも無理とは思われぬ体であったようである」〔桜田　1979　880〕

また、戦後だが、敬三自身を取材した記事にも次のように出てくる。

> 「ニセモノと疑われたことはよくあったね。隠岐へいった時も、いきなり農家の炉端へ上がり

込んで、お婆さんと話をはじめたので、ついてきた村役場の人に“ホンモノの閣下ですか”といわれてね」〔毎日新聞社　1961　29〕

調査中の敬三の様子はあまり語られることはないため、この両者の述懐は貴重である。敬三自身が関係した業務に伴う調査と違い[8]、諸々のことをあまり気にしない敬三のざっくばらんな姿が垣間見える例であり、話を聞かれた人々も気兼ねなく接触できたであろうし、子爵と話すとして畏まることもなかった（おそらく自分から子爵とは名乗らなかったであろう[9]）と考えられる。

昭和10年2月26日「旅の座談會」

昭和10年2月26日鉄道ホテルにて「旅の座談會」が行われ[10]、柳田國男、渋沢敬三、高橋文太郎、萩原正徳（『旅と伝説』編集兼発行人）、井上萬壽蔵（国際観光局）、鈴木清秀（鉄道省旅客課長）、高久甚之助（日本旅行協会）ら15名による座談会が行われた。敬三はその席で次のように言っている。

「渋沢　観光局で隠岐島を宣伝なさったらいいと思いますが…あんな景色のいい所はあるまいと思います。 井上　隠岐島はよく存じませぬが……　渋沢　是非宣伝なさったらいいと思いますね。一寸遠い處ですが……（中略）　井上　然し隠岐は一寸懸け離れて居るので、億劫のような気がしますね、どの位時間が掛りますか。 渋沢　松江を十一時に出ると、大概翌朝の五時頃には浦郷に着きます。」〔萩原　1935　18〕

これは司会であった井上が「鉄道省、旅行協会或は観光局等に対して御注文なり、御希望なり」〔萩原　1935　18〕をお願いして座談会を閉めようとした際の発言で、座談会は敬三と井上の会話で終了している。敬三が隠岐のことを座談会の最後に何としても言いたかったのかどうかは分らないが、いずれにしても第一次隠岐調査の経験を元に観光局に対して隠岐についての宣伝をお願いして座談会は終わっている[11]。薩南十島調査から隠岐調査というスケジュールの中で、薩南十島調査から隠岐調査へ向かう列車にて筑後新聞記者に語った調査の感想・後日談で「四圏の情勢は勿論未だ資料的投資なども許さない要するに内地国民としては最後に残されたる一人として南嶋十島民あることを念頭において進むことが肝要であることを痛切に感じた」として、様々な意味でメディア（ここでは筑後新聞）に対し十島を注目させようとする意図で発言をしていたように〔小林 2015b　122〕、為政者側である「鉄道省、旅行協会或は観光局等」や『旅と伝説』の編集者・読者に対して、観光という経済的な理由や隠岐調査によって知りえたような文化・歴史などを知ってもらうといった文化的な理由など、様々な意味で隠岐を注目させようとした可能性が考えられる。

そこには、フィールドワークとして、ただ学問的な興味で調査を行うのではなく、また、報告をもって調査を一過性で済ませるのではなく、その後のさまざまな場面で現地（この場合、隠岐）を考え、自身が出来る範囲において現地を思うという文脈上からの発言だったのではないかと考えられる[12]。「ニセモノ」と疑われるようなざっくばらんな敬三の姿とは、学術的にのみフィールドを捉えている調査者の姿でも、子爵「渋沢敬三」でもない、一人間「渋沢敬三」の姿であり、だからこそ、後日、笑い話として「ニセモノ」の話が出来るのであろう。人間「渋沢敬三」には薩南十島の場合のように「現地を思う」姿も当然あったと考えられ、「旅の座談會」の最後の発言にも繋がったと考えられる。

2）桜田の調査ノートとそこに書かれた持論

八束半島調査〈第一次隠岐調査〉 ―桜田の調査ノート―

隠岐調査後の島根半島への調査は、はじめから計画されていた訳ではなく「一行の人々と別れて唯一人、直ちに大根島にでかけたが、そのつもりで計画していたわけではなく、たまたま早朝、この島へ行く便船が境を出発するのを知って飛び乗ったままであった。同島の寺津についたのが七時一寸過ぎである」〔桜田　1981　174〕という調査であった。

この調査後、桜田は昭和15年に農林省水産局嘱託になり、昭和16年に紀元二千六百年（昭和15年）記念事業として『日本科学史』の編集が始まり、「漁業篇」の「漁船・海藻採取等」の担当になる。その関係からか昭和18年に「出雲の海草採取村を訪ねて」として隠岐・島根半島の再調査を行っている（『水産週報』昭和18年5月15日号）。

隠岐に関する櫻田資料である「隠岐手帖一」「隠岐手帖二」「八束の海辺」は、第一次隠岐調査（昭和9年5月）の資料であり、この慶應義塾大学文学部古文書室所蔵櫻田資料には管見ながら第二次隠岐調査関連の資料は見当たらなかった。これはおそらく、第二次隠岐調査はアチックにてその報告が刊行されており、櫻田のフィールドノートや原稿などもアチックに提出し、手元には残らなかったためだと考えられる。

第一次隠岐調査の櫻田資料は、フィールドノートというよりも、ある程度の完成原稿であり、アチックにおいて第一次隠岐調査の報告を刊行しようとした未刊行原稿かと考えられる。内容は、漁業を中心に、方言や語彙、第一次の島前・島後における旅程、民具の名称やもろもろの聞き書きなど、滞在時間が少ない中、その対象は多岐に亘っている。中でも前述した島前海士村菱における「糸満人」の話を聞いた際の聞き書きなど、このノートから「糸満人」というキーワードを通して薩南十島調査から第二次隠岐調査へと繋がったことがわかる記述があり、第二次調査が安達和太郎のアチック来訪だけが契機だったのではなく（後述）、第一次調査における「糸満人」の情報を知ったことにも由来しており、「糸満人」による漁や彼らの民俗を含む大枠としての「イトマン」を調査することが第二次調査へと繋がる理由でもあったと考えられる。

桜田「猟と漁の相似」という試論

櫻田資料の「八束の海辺」の最後の段において、桜田は漁と猟との事例比較に基づく類似性から感得した持論を展開している。漁と猟はいずれも技術の優れた者が主となり、「ムラギミはともかくとして、ヤマサキは名主と神主とをかねた者の如く思はれると申しましたが、ではその時に誰がヤマサキになるかで想像しますと最も優れた（中略）狩猟の深い狩人がなるといふ事になります。獲物をよく仕とめるといふ事は特にその者に神の恩寵があったと言ふ風にも考へられませうが、それよりも狩の技術にすぐれた者が神主になるといふ（早川さんが言ふ如く）風があつて、それが今は至る所に存するオビシヤ、オマト、モヽテなどといふ頭屋（中略）になるもの、弓をひく風事を残してゐるのでと思はれるのであります」（百十三頁）とし、「かういふ意味にも狩、漁の儀式やヤマサキ、ムラギミに注意してゆきたいと思ひます。」（百十三頁）、「で、ヤマミイロミがかういふ役を致すと存じますれば、此前申上げたやうな考からムラギミも毎海の神主であり従つて海全体をも主宰したのではないかと思はれるのであります。」（百十四頁）、「狩猟乃至漁撈国内の組織について出雲八束郡野波村の鰮地曳網を例にとり、その漁業権者に関するお話と致し、狩のヤマサキと漁のムラギミとを問題にとりあげた所まで申し上げたものでありました。でそれをもう一層かいつまんで申上げますとヤマサキは山の神祭を主宰し、部落の山に関する一切の統率者であつたやうである。野波のカリヤは部落の全漁業の指揮者であつて、狩のヤマサキにひとしいムラギミであつたと

思はれるが、しかしムラギミにはまだ海の神を主宰したといふ好い例はない。或はかういふ例が存すれば部落の海に関する指揮者であつたとみられ、今日浦々に残る年宮司、漁師惣代もムラギミに関係してゆくのではないかと思ふといふ事で御座いました。所があとで気がついてみますと漁撈指揮者である、例のヤマミ役即ち現在ムラギミと言はれるものが漁業の祭を主宰したと思はれる好い例があつたのであります。」（百十五頁）として、山の統率者であるヤマサキと野波のカリヤの事例や「八束の海辺」に記載されたその他の八束半島の調査をもとに、全漁業の指揮者であるカリヤや網親方といった統率者にあたる人の家（網宿など）にて初漁祝などの祭礼を行う事例をとりあげ、ヤマサキが祭礼を主宰するように、全漁業の指揮者が祭礼を主宰したのではないかとして、漁と猟の相似という持論を展開している[13]。

第一次・第二次隠岐調査の後、桜田はその対象を物質資料（猟具と漁具）やその方法・手法にまで広げ考察している。

アチック・マンスリー第十二号（昭和11年6月30日）では「漁具漁法の分類に就て」として「従来の分類は普通の網漁を除くの外は、主具副具法をも区別せず、一括して雑の部に入れてきたが、此雑の漁獲高は僅少でも、漁具の個数、漁法の分布の点では寧ろ此方が多く且つ広い位であり、漁具法の比較材料も此方に豊富に存しているばかりではない、大規模に発展した漁具の元の姿をも之に見る事が出来る様に思う。一体漁業の中には後世大掛りになり、単純な漁法が複合して一の漁業を形成したものが多いが、それ等のものとても大体に於て素朴は狩漁(ママ)の手法を遠く出ていぬのが、此業技術の特色であると思う。（中略）なおかかる小雑漁は経済的に何等発展し得なかった素朴な狩猟手法に非常に接近してくるように思われると共に、一方弓槍による狩、放鷹、罠、鳥網、黐（筆者注：もち）をつけて水禽を捕る延縄猟等の狩猟は漁猟(ママ)に近似した手法であると思われる。仍って近頃分類案を一歩進める為には、之等狩猟手法を併せ考えてみなければならぬ心要を特に感じて来た。之が実際魚猟と何程の関聯を有するかは未知だが、最も素朴な形の下に、手法の特質を摑む事に拠って分類し得られぬものとするならば、狩猟手法の研究は缺き得ぬのではあるまいか。水産技術家が今一段と分類を進め得なかったのも、かくの如き所に存したのではないかと思う。」（p 1）として、「八束の海辺」での持論を更に展開している。

この一連の桜田の考察に対して、敬三は「漁具（桜田君）“狩猟用具と漁具は同じだ”といふ説面白い」〔向山　2013　74〕としている。これは昭和11年6月21日にアチックに来訪した向山雅重に話したことであるが、そこに桜田本人がいない場で第三者（向山）に話している点からも、ある程度の積極的な評価をしていると考えていいだろう。

5. アチック関係者による初の刊行物　―第二次隠岐調査関連の三篇の報告書―

1）第二次隠岐調査のきっかけ（安達和太郎のアチック訪問、安達家とアチックの関わり）

第一次隠岐調査にて「他日機会があればこの島をいろいろな方面より総合的に研究しようと考えていた」〔桜田・山口　1935　1〕敬三やアチック同人は、翌年昭和10年4月にアチックを訪れた安達和太郎より、同年夏に糸満の漁師が隠岐の漁業家安達家に雇われて来ることを聞き、それを受けアチックでは隠岐の再調査を行うことになる。山口はその経緯について、「糸満の連中が安達家にひと夏雇われて隠岐にやって来て、彼らの舟と漁具で漁業をやる。わざわざ沖縄まで行かなくても、隠岐に行けばそれがみられるから、それをひとつ調べたらどうかということと、それから隠岐は日本で三圃制農業の行われている唯一の場所といわれているので、そこの牧畑農業も見聞しようという点もあったり、まあいろいろなことがありまして、隠岐へ行ってみたらという渋沢さんの発

案」〔山口和雄先生古稀記念誌刊行会編　1978 57-58〕であったと後日述べており、その主体者のは敬三であったことがわかる。この敬三の発案によって、桜田勝徳・山口和雄・岩倉市郎の三人で調査に赴くことになった。

このアチックを訪れた安達和太郎（以下、和太郎）には、第一次調査においてアチック一行が船越を訪れた際に出会っている。その際、和太郎は敬三から東京に来る時にはアチックを訪ねてくるように言われたという〔安達　1986 45〕。アチック一行はこの船越での安達家訪問の際に同地で食事をとっており、「ダンゴソバ（ソバ粉を丸めておつゆに入れる）」や大鍋で煮たアワビなどを食べ、敬三においてはこんなうまいアワビ料理は食べたことがないと感想を漏らしたという〔安達　1986　46〕。

図３　船の縁につけた梯子を潜水夫が上がり、潜水服の頭部分を外してあげる男性（渋沢史料館所蔵映像「隠岐Ⅰ」カット 40）

安達家とは、船越における網元の家であり、長崎俵物役所からスルメ納入鑑札を貰い、スルメを長崎へ送る廻船業も行なっていた家であった。その後、和太郎が当主の頃から、糸満の漁師と契約しイサキの追込網漁（マワシタカミ漁）の経営や、潜水夫を雇用した潜水漁（潜水器漁法。図 3）なども行なっている。本研究において安達家の話を聞いたのは現当主和郎であり、和太郎、武夫、和郎と、和太郎から三代目に当たる人物である。この和太郎の息子武夫と前述の勇は兄弟であり、「アチック・ミューゼアムのこと」を書いた弟勇は昭和 10 年時点で東京帝国大学の学生であった。第二次調査時に船越に帰省していた勇は次のように回顧する。

「丁度私も帰省していましたので、兄が鯛網漁やイサキ漁へご案内する発動機船に一緒に乗ってお供したことがあります。」〔安達　1986　45〕

安達和太郎は昭和 10 年 4 月に上京しアチックにて糸満漁民の出漁の話をしたほかにも、同年 6 月 17 日（アチックマンスリー「DIARY」第一号）(14)、隠岐調査後の 10 月 11 日（アチックマンスリー「DIARY」第五号）(15)、11 月 26 日（アチックマンスリー「DIARY」第六号）と幾日もアチックへ来訪している。

和太郎は、旧来の漁業に加え、新進の漁業（糸満との契約漁や潜水器漁など）も取り入れる漁業経営家であって、息子達を東京帝国大学に入れるなど、隠岐において経済的にも教育的にも進んだ考えを持つ人物であり、第一次・第二次調査に対して協力的であったこともここに関係するのかも知れない。また、和太郎が、たまたま糸満の大城組と契約して漁を行い、且つ、たまたまその漁を始めた時期がアチックの調査の時期と前後したという、二つの偶然が重ならなければ、アチックの隠岐調査は存在しなかったであろう。

2）第二次隠岐調査における調査ならびに調査・研究態勢

第二次隠岐調査の目的は前述のように、糸満の漁業と漁具、隠岐における漁業（安達家の漁業経営を含む）、三圃式農業（牧畑）といったことを中心に調査することであり、島前西ノ島における調査では島前船越安達家をベースに調査が行われ、糸満の漁業もさることながらその漁業経営者である安達家にも焦点が当てられていた。報告書である『隠岐島前漁村採訪記』では、その項目がたて

図４　浦郷湾船越港（安達和太郎家前）　寶運丸から降りる小袖姿の安達武夫氏（右、煙草をくわえている男性。2016年９月調査による。渋沢史料館所蔵映像「隠岐Ⅱ」カット５）

られていることはもちろん、映像でもその一端が垣間見える。たとえば、渋沢史料館所蔵映像「隠岐Ⅱ」カット５では、浦郷湾船越港（安達和太郎家前）洋上にてハギブニイ（『隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書』参照）に乗る人々やハギブニイに乗る少年（寶運丸の艫に手をかける）を撮影する一方、寶運丸から降りる小袖姿の安達武夫（煙草をくわえている。武夫は安達和太郎の息子。2016年９月調査による）の姿と（図4）、その後の武夫が寶運丸に乗る大城組の船員と会話をするところまで撮影している（いずれも港からの撮影）。これらは漁を行う前の普段の姿を撮影している部分ではあるが、当然そこにはこの漁を企画し出資している安達家の人々の姿も映像に収めようという意図があるであろう。

第二次隠岐調査では、祭魚洞文庫所蔵資料である昭和７年刊の『概観島前地誌』（以下、『地誌』）をはじめとした当該地域の各種報告書や論考を予習した上で調査を行った可能性が高く[16]、調査後の報告書をまとめる段階においても、『アチックマンスリー』第四号に「アチックの諸氏の精勤振と云つたら素晴らしいもので、中でも桜田、山口両氏は向ふ鉢巻で、引続いて旅行の報告を纏められている」とあり、調査から上梓まで四か月という短期間に集中してまとめられたことがわかる。内容は集落の概観から沿革、漁業経営や販売など精緻な報告となっており、写真を巻頭に置き、図や表を本文にいれ、最後に聞き書き調査の速記を掲載している。

3）第二次隠岐調査に関連する三篇の報告書

隠岐調査は、結果的に第一次調査が予備調査となり、第二次調査が本調査となったアチックの初めての事例であり、第二次調査において、一地域（ここでは隠岐島前）を調査対象として限定した調査であった。

隠岐調査の場合は、薩南十島調査と連続して行われるという偶然的な調査であり、たまたま予備・本調査という図式（第一次調査と第二次調査）になったと考えられるわけであるが、この隠岐調査以降では、「岩手県石神村調査」（昭和９年９月23日、昭和10年７月、昭和11年９月）、「朝鮮多島海調査」（昭和11年８月17日～20日）、「瀬戸内海調査」（昭和12年５月13日～25日）などが、複数人員の共同調査後に再度調査を行なうという形の調査であり、これらの調査がいずれも隠岐調査の経験を踏まえた上に成り立つ調査であったと考えられる。つまり、予備調査（ここでの隠岐の第一次調査）を行った後、民俗を中心とした本調査（第二次隠岐調査）を行うという調査方法が採用された調査の嚆矢が隠岐調査なのであり、報告書までを完備した当時のアチックの理想とされる調査の一つの形であったと考えられるのである[17]。

この隠岐第二次調査が、アチックにおいて調査を行った後に報告書を刊行するという初めての事例である。アチックの刊行においては「彙報」「ノート」を冠して出版される体裁をとったが、このそれぞれに振られた通し番号が年代順ではないために見逃されやすいが、時系列的に刊行順に並べると表１のようになる。この表を見ると分るように、アチックの刊行物の初期では、彙報第２の竹内や彙報第４の吉田といったこの時点ではまだアチックに直接参加していない人物の著述を刊行している。これは「論文を書くのではない。資料を学界に提供するのである。山から鉱石を掘りだ

表１　アチック刊行物時系列順（『美保ノ關安藝三津伊豫大三島漁村見聞記』まで）

	巻号	題名	著者	刊行年
1	彙報第２	小學生の調べたる上伊那川島村郷土誌	竹内利美編著	昭和９年11月23日
2	彙報第４	男鹿寒風山麓農民手記	吉田三郎著	昭和10年３月１日
3	彙報第３	羽後角館地方に於ける鳥蟲草木の民俗學的資料	武藤鐵城著	昭和10年５月
4	ノート第２	明治前期を中心とする　内房北部の漁業と漁村經濟（上）〔見聞記〕	山口和雄著	昭和10年10月10日
5	ノート第６	喜界島生活誌調査要目	岩倉市郎編	昭和10年11月５日
6	ノート第４	隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書	櫻田勝徳著	昭和10年11月15日
7	彙報第５	武藏保谷村郷土資料	高橋文太郎著	昭和10年12月10日
8	ノート第３	隠岐島前漁村採訪記	櫻田勝徳、山口和雄著	昭和10年12月
9	ノート第５	美保ノ關安藝三津伊豫大三島漁村見聞記	櫻田勝徳、山口和雄著	昭和11年１月

し、之を選鉱して品位を高め焼いて鍰（注、かん）を取り去って粗銅とするのが本書の目的である。（中略）原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的なのである」〔渋沢　1937　18〕とした『豆州内浦漁民史料　上巻』における「本書成立の由来」に通ずる「資料の提供」を優先する考えから、資料としての重要性に基いた刊行でその対象はアチック関係者だけにとどまらないという態勢であった。このような出版体制の渦中においてアチック関係者としての初の刊行物となったのが『隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書』と『隠岐島前漁村採訪記』の第二次隠岐調査の報告書だったのである。

上記、隠岐に関する二つの報告書と関連した報告書が両者刊行の翌11年１月に『美保ノ關安藝三津伊豫大三島漁村見聞記』として刊行している。これも、第二次隠岐調査と連続して行われた調査の報告書であって、昭和10年８月の隠岐調査前の境港・美保関（10、11日）、調査後の広島県安芸郡三津（23、24日）、愛媛県大三島（24日）の調査をまとめた報告書である。内容は漁法や漁業経営を中心とし、特に大三島ノウジ集落では移住漁民の集落の盛況だった頃と現在の様子が記録されている。当初の予定では『アチックマンスリー　第二号』「MEMORANDUM」（1935年11月）に隠岐から広島県安芸三津とまわりその後「同県竹原に立ち寄った上で今月末帰京される筈である。」（『アチックマンスリー　第二号』「MEMORANDUM」3）とあるように、隠岐（糸満）、能地（現三原市幸崎町）、竹原（現竹原市二窓）と、専業漁民であり且つ移住漁民の代表的な集落をこの機会に回ろうという計画があったと考えられる。しかし、能地は三原市の能地ではなく、何故か大三島のノウジ集落で調査を行っただけで竹原には回っていない。なぜこのような経緯になったかは不明であるが、いずれにせよ専業的漁民で移住漁民の代表的な集落の調査として瀬戸内海における専業的漁民の集落が選ばれている所に、調査の軸として移動・出漁といういわゆる「イトマン」という研究のキーワードがあったといえるであろう。

この第二次隠岐調査を基本とした三篇の報告書は、それぞれが総合的な民俗誌でなくても貴重な資料となりうることを示した報告書であって、いわば実験的で野心的な報告書をあえてアチック初の刊行に持ってきたという可能性も指摘できるであろう。そこには資料や研究に関する多様的な視点を持つ敬三やアチックの姿勢が垣間見えていると指摘できる。

また、第二次隠岐調査に参加した、桜田勝徳、山口和雄、岩倉市郎は、いずれも昭和10年にアチックに参加したばかりというメンバーであった。敬三やアチックがどのような理由で彼らを選んだのかはその詳細は不明であるが、おそらく、第一次隠岐調査にて、その前の薩南十島調査から継続していたそれぞれの島における漁業と薩南十島と隠岐の漁業の比較、「イトマン」というキーワードをもとに、薩南十島と隠岐のそれぞれにおいて行われる「イトマン」の漁業という視点があ

り、隠岐における漁業の実態や漁業経営とその関連にある出漁者（ここでは主に糸満）の関係性を調べようとしたことが前提にあるであろう[18]。

そのため、『漁村民俗誌』（昭和9年）を著すなど漁業に関心があり且つ薩南十島と隠岐第一次調査に参加した桜田と、日本水産史を研究し漁業に関する歴史的（史学的）関心があった山口、喜界島阿伝（鹿児島県喜界町）出身で、昭和2年に伊波普猷の勧めで『喜界島方言集』をまとめ、多少なりとも糸満の言葉に近い言語圏出身で速記を応用した聞き書きを行えた岩倉を選出したと考えられる[19]。中でも桜田と岩倉は大阪民俗談話会に参加しており、面識はあったと考えられる。山口は東京帝国大学にて敬三の同級生であった土屋喬雄の下で学んだ関係から、卒業と同時にアチックに昭和10年4月から参加している。アチックに参加するようになってまだ日の浅い三人ではあるが、結果的には最適任の人物を選んだ形となったわけである。

『隠岐島前漁村採訪記』は、隠岐における漁業（安達家の漁業経営を含む）、三圃式農業（牧畑）の報告であって、総合的な民俗誌というよりも限定的な報告書である。また、『隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書』は、隠岐に出漁に来ていた糸満の漁業従事者からの調査に基づく報告であり、糸満という土地での実地調査に基づかない隠岐における（別の土地における）調査から記述した糸満の漁業と漁具の報告であり、特殊な報告書の形態を執っている。

この両者はアチックとして記念すべき、アチック関係者による初の刊行物であり、且つ、実地にて行った聞き書き調査・参与観察調査に基づいた報告書であって、前者は限定的な報告書（『隠岐島前漁村採訪記』）であり、後者は特殊な条件下の報告書（『隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書』）であった。また、『アチックマンスリー』第四号に「アチックの諸氏の精勤振と云つたら素晴らしいもので、中でも桜田、山口両氏は向ふ鉢巻で、引続いて旅行の報告を纏められている」とあるように、調査から上梓まで四か月という短期間でまとめられた調査報告書でもあった。この調査から刊行までの一連の流れにおいて、総合的な報告書の刊行まで調査を継続しようとしなかった理由は何であろうか。そこには薩南十島調査のように継続した調査の構想があったかもしれないが[20]、糸満の漁業と漁具、隠岐における漁業（安達家の漁業経営を含む）、三圃式農業（牧畑）などが調査の目的であった第二次隠岐調査においては、あえて現時点（昭和10年8月の調査まで）で刊行できる部分を刊行してしまおうという考えがあり、また、「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究という大筋の研究課題があったからこそ、それに即した三篇の報告書として刊行したと考えられる。

アチックの刊行を時系列順にみた場合、結果的にこの「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究における報告書は、漁業史研究（山口和雄『明治前期を中心とする　内房北部の漁業と漁村經濟（上）〔見聞記〕』昭和10年10月10日）に次ぐ刊行であり、民具研究における刊行（アチック・ミューゼアム編『所謂足半に就いて』は昭和11年5月30日）以前に行われているのである。

6. アチックにおける隠岐調査の意義

隠岐調査における調査成果は昭和9・10年という時期の貴重な事例報告であり地域における貴重な民俗・歴史資料となっている。特に糸満に関わる調査成果は『糸満市史　資料編12　民俗資料』（平成3年　糸満市史編集委員会）や『日本における海洋漁民の総合研究』（平成元年　九州大学出版会）などに引用・利用され、隠岐以外においても貴重な記録となっている。

このように地域や学界における貢献以外にも、隠岐調査はアチックの研究史においても、さまざ

まな意義・意味を持った調査であった。

アチックで行われた「イトマン」として括られる人々や漁民・船、あるいはこれらの移動・出漁などの研究において、薩南十島調査とそこから引き続き行なわれる第一次隠岐調査までが、アチックにおける「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究のはじまりであり、具体的な調査を行うのは第二次隠岐調査がその嚆矢であったこと。

朝の潮汲みという民俗学的慣行からは、「日本人」と塩の関係性という民族学的視点へと展開し、アチックにおける「塩」という研究課題を更に考えさせた事例であったこと。

16ミリによる牛突きの撮影では、農業や漁業といった生業面以外で行なわれる余暇的・余興的な行事ということを意識した上での撮影であり、それが後の新潟県古志郡二十村の牛突き調査にまで繋がる事例であったこと。

第二次隠岐調査を基本とした三篇の報告書がアチック初の刊行物で、それぞれが総合的な民俗誌でなくても貴重な資料となりうることを示した報告書であり、そこには資料や研究に関する多様的な視点を持つ敬三やアチックの姿勢が垣間見えているなどである。

また、アチック同人としてその後もアチックの水産史研究などで活躍する桜田が、アチックに入る前のこの第一次隠岐調査にて、漁と猟の相似という持論を考察し、その後、アチックに入ってからの第二次隠岐調査においても、第一次隠岐調査経験者として山口・岩倉と共に漁業に関する知識や事例といった経験値を増やすとともに、漁と猟の相似から猟具と漁具の比較といった民具研究にまで展開したことなど、アチックのみならず、後の桜田自身の漁業研究にも有益な経験となったことは言うまでもないであろう。

アチックではこの隠岐調査以降もさまざまな調査を行い、アチック関係者による総合的な民俗誌を目指した調査としては昭和12年の志摩和具調査において行われることになるが、その前段を為す隠岐調査は、限定的であれ「資料を提供する」というアチックの理念に基づいた姿勢の下に報告書を刊行し、「イトマン」をはじめとする出漁や移住・移動する漁民の研究の文脈上における調査としてのメルクマールであり、且つ、アチックにおける研究のさまざまなメルクマールともなった調査でもあったのである。

参照文献

安達勇　1986「アチック・ミューゼアムのこと」『青淵　第四四三号　二月号』渋沢青淵記念財団竜門社

アチックミューゼアム　1935「MEMO」『アチックマンスリー　第一号』アチックミューゼアム

アチックミューゼアム　1935「MEMO」『アチックマンスリー　第四号』アチックミューゼアム

アチックミューゼアム　1935「MEMO」『アチックマンスリー　第五号』アチックミューゼアム

アチックミューゼアム　1935「MEMO」『アチックマンスリー　第六号』アチックミューゼアム

神奈川大学日本常民文化研究所　2012『アチック写真 vol. 6』神奈川大学日本常民文化研究所

拵嘉一郎　2007『澁澤敬三先生と私―アチック・ミューゼアムの日々』（神奈川大学日本常民文化叢書7）平凡社

小林光一郎　2014「澁澤敬三が組織する共同研究―昭和9年薩南十島調査を事例に」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か―日本民族学の二〇世紀―鳥居・澁澤・梅棹・佐々木』東京堂出版

小林光一郎　2015a「渋沢敬三における民具観の変遷」『歴史と民俗　神奈川大学日本常民文化研究所論集31』平凡社

小林光一郎　2015b「アチック・ミューゼアムの研究における渋沢敬三のポジション―イトマン・出漁・移動を事例に―」『国際常民文化研究叢書　第10巻「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」』神奈川大学国際常民文化研究機構

桜田勝徳（木賊）　1935「漁村二題」『アチックマンスリー　第四号』アチック・ミューゼアム

桜田勝徳　1979「敬三とアチックミューゼアム」渋沢敬三伝記編纂刊行会『渋沢敬三　上』渋沢敬三伝記編纂刊行会

桜田勝徳　1980「出雲の海草採取村を訪ねて」『桜田勝徳著作集 1』名著出版
桜田勝徳　1981「大根島旧記」『桜田勝徳著作集 4』名著出版
桜田勝徳　1982a「十島巡遊　奄美大島」『桜田勝徳著作集 7』名著出版
桜田勝徳　1982b「八束の海辺」『桜田勝徳著作集 7』名著出版
桜田勝徳・山口和雄編　1935『隠岐島前漁村採訪記』アチック・ミューゼアム
桜田勝徳・山口和雄編　1936『美保関・広島三津・伊予大三島　漁村採訪記』アチックミューゼアムノート第 5　アチックミューゼアム
渋沢敬三　1937「本書成立の由来」『豆州内浦漁民史料　上巻』、pp. 1-27、アチックミューゼアム
渋沢敬三　1961「第三部　旅譜と片影」『犬歩当棒録』角川書店　pp. 424-473
高橋文太郎　1934「隠岐島の旅」『ドルメン　第三巻　第八号』（昭和 9 年 8 月）国書刊行会
萩原正徳編　1935「旅の座談會」『旅と伝説　昭和 10 年 4 月号』三元社
毎日新聞社　1961 年「人物現代史　屋根裏の博物館長・渋沢敬三」『サンデー毎日　昭和 36 年 10 月 29 日号』毎日新聞社
民間伝承編集部編　1959『民間伝承　第二十三巻　第四号　昭和 34 年 5 月号』六人社
向山雅重　2013「向山雅重『野帳』翻刻」（翻刻：櫻井弘人）『伊那民俗研究　第 20 号』柳田國男記念伊那民俗学研究所 pp. 67-81
山口和雄先生古稀記念誌刊行会編　1978『黒船から塩の道まで　―研究史的回顧―』財団法人日本経営史研究所

参照 Web サイト
・一畑グループ http://www.ichibata.co.jp/group/chronicle/chronicle/1st.html（2017 年 6 月 30 日閲覧）

注

（1）例えば、前者の場合は、筆者が関わった検証作業である、2010 年～2015 年において行われた「渋沢敬三記念事業」の内の公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センターにおける「敬三関連情報へのアクセス向上：（1）渋沢敬三総合年譜の作成／（2）収集資料群の把握／（3）敬三紹介サイトの作成」業務などが渋沢史料館に引き継がれている。後者の場合は、筆者自身の研究に限っても次に課題を多く残したままであり、筆者以外に没後 50 年事業等に関わった人々も筆者と同様の状況のままだと考えられる。

（2）慶應義塾大学文学部古文書室所蔵資料である櫻田勝徳資料をさすときは「櫻田」の文字を使いそれ以外の場合は桜田を用いることにした。

（3）美保関において調査をしていた関係上、地理的に境から乗船したと考えられる。

（4）その後、23 日午後、広島県安芸三津町に赴き、敬三に依頼された漁村の日記をつけることをお願いするため進藤松司に会う。24 日朝、愛媛県大三島大小祇神社に詣で、同日宮浦ノウジ集落で老漁夫から漁業について話を聞く。この集落は漁業を専業にしている集落だが、老齢化が進み漁業の担い手が都市へと流出して「正に滅びやうとしてゐるとみられた。」（桜田　1935）集落であった。その後、広島県大崎島木江を経て東京に戻った。

（5）昭和 10 年 8 月の隠岐調査の途中、岩倉は持病である胸の病気を再発し、20 日、急遽、隠岐から帰京した。敬三のはからいでアチックにて静養していたが、一旦、夫人の実家である新潟県南蒲原郡見附町（現見附市）へ静養に向かう。9 月 1 日に東京を出発、ふたたびアチックへ戻る 10 月 7 日までの期間、静養しつつ折を見て写真撮影などを行った。ちょうど稲刈りの時期にあたっていたこともあり、田舟やはざ、にうなどの米作りに関わる農作業を中心に、川舟や家屋などの写真撮影をしている。岩倉は、中学校入学後から病になり、以前から病気と静養を繰り返していた。この静養の前にも、夫人の実家である見附町で静養をしたことがあった。その時には夫人の祖母や母から昔話を聞き、それをもとに昭和 7 年『加無波良夜譚』（筆名文野白駒）を出版している。また、昭和 10 年 9 月の見附町での静養後、さらに静養をするべく昭和 10 年 11 月 11 日から昭和 12 年 5 月 1 日、出身地の喜界島へ向かう。この喜界島での静養中に小学校教員時代の教え子である拵嘉一郎とともに調査を行い、その後、『喜界島生活調査要目』（昭和 10 年 11 月）をはじめ『喜界島農家食事日誌』（昭和 13 年 11 月）、『喜界島阿伝村立帳』（昭和 15 年 1 月）、『喜界島漁業民俗』（昭和 16 年 10 月）など、この時に収集した資料を順次整理を行いアチックミューゼアムで発行していった。

（6）たとえば薩南十島の中之島では「糸満人がクリ舟をもって大亀をとりに来ていた。もはや十匹位とっていた」〔桜田　1982a　359〕という。常民研所蔵アチック写真でも「中之島　大亀　糸満が捕え大島へ運搬するもの。島人は卵は採るも親を捕えざる習慣なり。（谷口熊之助作）」と写真台紙に書かれて

いる（ア-10-68）。
(7) 流通経済大学所蔵祭魚洞文庫内の薩南十島調査における事前報告である『櫻島噴火記』（流通経済大学所蔵祭魚洞文庫：『櫻島噴火記』請求記号 291. 97-5）に、隠岐汽船株式会社『隠岐遊覧案内』（昭和 5 年 7 月。パンフレット）が一緒にまとめられている〔小林　2015b　121-122〕。薩南十島調査の事前報告書に対して第一次隠岐調査においてはパンフレット 1 枚と対照的であり、隠岐調査が事前準備も出来ないほど突発的な調査であったと考えられる。
(8) これについては拙著 2015「アチック・ミューゼアムの研究における渋沢敬三のポジション―イトマン・出漁・移動を事例に―」『国際常民文化研究叢書　第 10 巻「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」』神奈川大学国際常民文化研究機構を参照。
(9) 上記にも「農家の炉端へ上がり込んで、お婆さんと話をはじめた」とあるように、おそらく自分から子爵とは名乗らなかったであろうと考えられ、肩書きなど名乗らなかった可能性も考えられよう。
(10) 恐らく、座談会の内容から鉄道省と『旅と伝説』によって共催された会と考えられる。
(11) 参加者に柳田をはじめ自分よりも年配の人々がいるにも拘らず、隠岐の話をしている点でどうしても隠岐の話をしておきたかったのではないかと考えられる。
(12) それが本当に現地の為になるかの是非はここでは問わないが、少なくとも、敬三は現地の為になると考えていると思われる。
(13) 推測でしかないが、「早川さんが言ふ如く」という記述があるように、第一次隠岐調査に参加した調査者であり、奥三河調査を行っていた早川や、秋田のマタギの調査を行っていた高橋といった、いわゆる「山」の調査経験のある人々との交流も影響している可能性が考えられる。この一種のアチックにおける小さな学術交流ともいえる経験が「漁と猟の相似性」というアイデアを桜田に与えさせたといえるかもしれない。
(14) 昭和十年六月十七日安達和太郎・勇がアチックを訪れている（アチック・ミューゼアム　1935「DIARY」『アチックマンスリー　第一号』）。
(15) 安達勇「アチック・ミューゼアムのこと」にて「昭和十年の秋、東大在学中だった私は、折から上京してきた父に連れられて芝区三田綱町の渋沢敬三様のお邸に伺い、邸内のアチック・ミューゼアムを見せていただいたことがあります」〔安達　1986　45〕とはこの昭和 10 年 10 月 11 日と考えられる。
(16) アチック写真における撮影傾向としても、『地誌』に掲載されている情報（含む写真）以外を被写体として撮影している傾向が確認できる。
(17) ここでのアチックの理想とは、隠岐調査の前に行なわれた薩南十島調査等の反省も踏まえた上で、報告書刊行までを踏まえた、「論文を書くのではない。資料を学界に提供するのである。」〔渋沢　1937　18〕という敬三の考えに基づいたアチックの目標を体現した調査という意味における意味である。
(18) 特定の地域の調査ということでは、アチックでは総合的な民俗誌を目指す調査を行おうとしていた傾向がある。たとえば、第一次隠岐調査直前の薩南十島調査や、岩手県石神村調査（昭和九年九月）などである。この流れからいえば、第二次隠岐調査を嚆矢に隠岐の総合的な調査が企画されても良さそうであるが、第二次隠岐調査は、岩手県石神村調査後の調査にあたり、現行での最良な調査として、隠岐の漁業を中心とした調査に対象を絞った可能性が考えられる。アチックにおいてこの時期は、総合的・学際的な調査から、民俗学に基づいた研究領域の研究者による調査への端境期であり、第二次隠岐調査の時点において、岩手県石神村調査で行おうとしていた学際的な総合調査のむずかしさがある程度予見できていたのかもしれない。
(19) 岩倉は「人々の言葉が持つ音と響きの微妙で細やかなニュアンスを、的確に把握・理解できる稀有の耳の持ち主で、言語学者としての天稟の素質」〔拵　2007　83〕を持った人でもあったという。
(20) これについては拙著 2015「アチック・ミューゼアムの研究における渋沢敬三のポジション―イトマン・出漁・移動を事例に―」『国際常民文化研究叢書　第 10 巻「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」』神奈川大学国際常民文化研究機構を参照。この中でも触れたが、第二次隠岐調査を行なっていた時期においても、早川が昭和 9 年 10 月に黒島、翌 10 年 6 月悪石島と補完的な調査を行なっている。しかし、その進捗具合は決して良いとはいえない状態だったのではないか。結果論だが、薩南十島調査の場合は複数の報告者、遠隔地の報告者といった執筆体制、複数年に亘る長期的調査、島嶼という複数地域の調査などといった条件・理由により報告書刊行は実現しなかった。この実現しなかった薩南十島調査における報告書作成までの経験を元に、第二次隠岐調査では現段階でまとめられるものから刊行しようとした可能性が考えられるであろう。